寄せ太鼓

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館
運営協議会 広報部会
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号（〒807-1261）
TEL 093-619-1149
FAX 093-617-4949

第26回 宿場まつり

11月4日(日)開催

みんなで踊ろう！宿場をどり
盛り上げよう！宿場まつり

筑前こやのせ

本年度で第26回となる「筑前木屋瀬宿場まつり」は11月4日の日曜日、長崎街道筋を車両通行禁止にして開催されます。

このまつりは「みんなで踊ろう！宿場をどり」をキャッチフレーズとして宿場をどりを中心に「町並み資料館」や「歴史探訪スタンプラリー」など木屋瀬に残された宿場町の名残りを楽しんでいただきながら町の活性化や伝統継承を狙いとして企画されています。

祇園まつり終了後の七月末に実行委員会を立ち上げ、高宮実行委員長を始めとする役員体制と総務、企画、広報、運営各部門別の役割分担などを決め、これまで四回にわたる実行委員会で具体検討をすすめてきました。まつりは木屋瀬宿記念館広場での消防音楽隊の演奏を皮切りに、開会式がスタートします。

実行委員長の挨拶に続き、ご来賓を代表して北橋市長のご挨拶もあります。そして、かわいい子どもたちの開会宣言でまつりの幕が切っておとされます。まつりの主な内容は宿場をどり総踊りを中心に、筑前各地の伝承盆踊り、木屋瀬中学校マーチングパレードおよび吹奏楽演奏、同じく部活動紹介パレード、木屋瀬小学校学習発表会、保育園児の絵画展、ちびっ子ダンス、スタンプラリー、消防署のはしご車や地震体験車、大道芸、町内綱引きなどと共に、同じ街道筋の名家による町並み資料館、みちの郷土史料館での「江利チエミ」展などがまつりを盛り上げます。さらに、青空市場や蚤の市による出店でまつりの賑わいが一段とはずむものと思われます。まつりの運営は各町内会の世話人を中心にボランティアの皆さんが各部署で活躍されます。

このまつりが、内外に誇り得るものとして盛況裡に終了しますことを念じ、住民の皆さんの物心両面でのご協力をお願い申し上げます。

木屋瀬宿記念館運営協議会
広報部会長 徳永興紀

今年は11月11日(日)開催です

こやのせ座落語会

11月11日（日）に木屋瀬宿記念館こやのせ座におきまして、「こやのせ座落語会」を行います。出演は北九州市出身の林家きく麿師匠と、橘家門朗さん（前座）です。

開演は14時（開場13時30分）で入場料は大人500円（当日800円）、中学生以下200円（当日300円）、未就学児無料となります。

現在、お電話での予約を受け付けております。ぜひ、ご家族そろってお越しください。

プロの話芸をぜひご堪能ください

年末恒例 年越しそば打ち

毎年恒例となりました「年越しそば打ち」を今年も開催します。そば打ち名人の方をお招きして、そば打ちの体験から、そばの保存方法、調理法を指導していただきます。

日　時：平成30年12月28日㈮ 10：00～15：00
会　場：長崎街道木屋瀬宿記念館
参加費：1200円（実食 鴨そば）
※材料費、7人分のそばが持ち帰れます。
※追加1000円で別途7人分持ち帰れます
定　員：先着30名（12月4日㈫より電話での予約制）
申込先：長崎街道木屋瀬宿記念館　TEL093－619－1149

イベントのお知らせ

イベントの詳細は木屋瀬宿記念館までお問い合わせ下さい

みちの郷土史料館 第70回企画展「江利チエミ展」～梅井崇生コレクション～

みちの郷土史料館企画展示室では、第70回企画展「江利チエミ展～梅井崇生コレクション～」【10月27日（土）～12月2日（日）】を開催しております。

1963年に門司市・小倉市・若松市・八幡市・戸畑市の5市合併により誕生した北九州市。これを記念して作られたご当地ソング「北九州音頭」をご存じでしょうか？名前を知らずとも盆踊りやお祭り、運動会などで耳にしたことがあるのではないかと思います。その「北九州音頭」を歌った歌手こそ、昭和歌謡史を彩った大スター「江利チエミ」です。

今回の企画展では、北九州にゆかりのある「江利チエミ」を、梅井崇生氏（八幡西区在住）のコレクションをお借りし、展示・紹介しています。

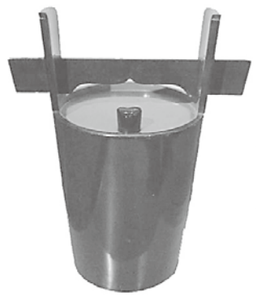
木屋瀬いろは歌留多大会

平成31年1月6日（日）に「木屋瀬いろは歌留多大会」を開催します。木屋瀬の文化と伝統が織り込まれた、木屋瀬ならではの歌留多に触れる貴重な機会となります。参加者には記念品も用意しておりますので、皆様ふるってご参加ください。

こやのせ New Year コンサート2019

平成31年1月26日（土）、響ホール室内合奏団の方をお迎えして、今回で7回目となります「こやのせ New Year コンサート」を開催します。どの年代でも楽しめるような幅広い楽曲をご準備くださいます。皆様のご来場をお待ちしております。

木屋瀬宿記念館 収蔵品紹介 「カラクリ酒樽」



江戸後期～明治時代に製作されたものと思われます。幅27cm・高さ32cmの木製で、胴は黒色、鏡（蓋）は朱色の漆が塗られた、一見なんの変哲もない酒樽です。実はこの樽、通常の樽のようにお酒を移し入れるための口と別に、角（柄）の横側面に小さな注ぎ口がついていて、そこから杯に直接お酒を注ぐことができるカラクリ構造になっています。

九州国立博物館で2011年に行ったX線CTスキャン調査により、角の横部分を三角錐状のキリのようなもので穴をあけ、下からはネジのようなもので円く穴を開け、交差させることで液体が通る管を作っていることが分かりました。このことから、昔の技術力の高さと、物に遊び心を加えられるほど平和で豊かな時代だったことが窺えます。

この酒樽は現在、みちの郷土史料館体験コーナーに展示しています。実際に触って、注ぎ口を間近でみることもできますので、ぜひ記念館に遊びに来てください♪

←ここに管が開いているのがわかります

X線写真

側面の注ぎ口

（木屋瀬宿記念館　学芸員：岩崎秋沙）

シリーズ　筑前木屋瀬宿　神仏めぐり

第44回　大儀山　永源寺　地蔵盆

木屋瀬宿には、いろいろなお地蔵さんが祀られています。西構え口近くの妙運寺には、子宝に恵まれるといわれる子安観音、改盛町の街道に面しての愛宕さんには、火除け、失せ物、脚気に効能があると言われる将軍地蔵、長徳寺境内には、水子地蔵や元気でぽっくり往生できる、ぽっくり地蔵さん等があり、昔から、木屋瀬の人達は地蔵信仰に大変篤かったようです。

永源寺の六地蔵（写真左）と長徳寺のぽっくり地蔵（写真右）

元来、お地蔵さんはインドの神様で、その後、中国に渡り道教と融合して奈良時代に日本に伝来したのです。

奈良時代の貴族社会では受けいれられず、鎌倉時代に、人間は死ぬと、六道（地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・天界・人間界）を輪廻するとする浄土思想の教えが広まり、特に地獄の惨状と極楽を対比して描いた絵巻物で庶民に伝えられました。その六道輪廻から地蔵が救ってくれるとして地蔵信仰が爆発的に広まりました。その後、旅人や村の守り神、庶民の願いが叶う仏として、又、姿が子供に似ている為、子供を守ってくれる仏として信仰されるようになりました。

さて、今年の八月二十四日、永源寺の地蔵盆に御参りしました。境内は盆提灯が沢山飾られ、子供連れの親子で賑わっていました。まず、本堂で和尚さんがお地蔵さんの徳を子供達にも分かりやすいようにお話があり、影絵や子供達によるお地蔵さんの歌が披露されました。お地蔵さんの歌は、木屋瀬の文化を残す事に大変功績があった、岩尾四十三郎氏の作詞で、こんな歌です。

「永源寺の永源寺の地蔵さん
　にこにこ笑顔でよだれかけ
　雀と遊んでいるうちに　お歳が百になんなった」

最後は境内で、木屋瀬音頭を輪になって子供達が踊りました。木屋瀬音頭は、伊馬春部先生の作詞で、一時は小学校の運動会などで踊られていましたが、昨今は忘れられ残っていないと思っていました。ここで継承されているのに驚きました。永源寺には、越ちゃん地蔵と六地蔵が祀られています。特に六地蔵の前で、まっくり返ると一年間無病息災で、願いごとが叶うとして、昔から人気の地蔵さんです。

地蔵の前は赤い毛氈が引かれ、お花やお菓子がお供えされていました。子供時代を思い出させてくれる、夏の夜の楽しいお祭りでした。

（こやのせ音頭の一節）
きゃんせ　きゃんせ　きやしゃんせ
ほんに　こやのせ　よかとこばい
せ～とんてんとん
流れ来るこやのせ音頭地蔵盆

宿場木屋瀬街づくりの会　会長　野口靖彦

わたしの昔話

【柴田豊廣遺稿集】より

■ 史蹟　構口（一）

木屋瀬は町全体が博物館のようです、と言っていた時もありましたが、今では諸々の建物が、それぞれに星霜を重ねに重ねて、朽ちては解かれて姿を消しています。木屋瀬宿は他の宿場では見られない、平面城郭のような構成であり、構口や袋小路等で宿場全体を取り囲んでいましたので、人々は明るく安らかに暮らしていました。藩政時代より宿場木屋瀬を守りつづけてきた「構口」が南の入口に泰然と残っています。「構口」には木製の大門と頑丈な扉が設けられており、常時関守役人が控えていました。日の出と共にこれが開かれ宿場の営みがはじまり、日没と共に閉ざされて宿場は夜光を灯します。

殿様の行列が、この「構口」で列を整え歩調を合わせ、下に下にと甲高い声とともにしづしづと進んで来ます。かしこまった隊列からお殿様の威光が伝わってきていました。この「構口」から、時には御殿女中を従えた奥方様の蒔絵の駕籠の行列を本陣にお迎えすることもあり、御側女中に守られた紅のお駕籠の姫様を「構口」から本陣へお送りすることもありました。

こんな時、本陣そばの婦女子は装いも新たにお迎えしていましたので、本町は時ならぬ華の都となりました。町の本通りは大型の家々が堂々と馬乗り形に並立しその軒下で人々はお迎えしていました。

この「構口」は、長崎街道と筑前内宿街道を旅する人々が必ず交わる要所と言われた木屋瀬宿の大事な番所でもありました。今は歳月も流れて黒ずんだ大石積だけが残っています。追分宿と呼ばれ川越宿とも呼ばれて大賑わいを呈していました。「構口」をじっと眺めていますと「わしは川筋の都、木屋瀬のことならなんでも知っちょるばい」と言っているようで問えば答えてくれそうです。

この「構口」は、古き良き歴史の里、木屋瀬を守りつづけてきた貴重な文化遺産です。大切に保管していきたいものです。

本町　柴田由美子

筑前木屋瀬

今昔歳時記　第4回

紅屋泰助氏（故柴田泰助氏）の「筑前木屋瀬今昔歳時記」の第4回目です。

今回は、前段では紅屋泰助氏が会長を務められた木屋瀬商工連盟や筑前（ちくぜん）木（き）驛（えき）、屋号「紅屋」のご紹介、後段では六月の行事・風物について前編をご紹介させて戴きます。

木屋瀬商工連盟は明治三十年創立の、北九州市内では最古・最長の歴史を誇る商工団体でございます。発会以来、木屋瀬の歴史と共にあり、今に残る伝統行事の数々を中枢となって支えてきた団体でもあります。次に、筑前木驛とは宿場往時の筑前木屋瀬驛の略称です。

又、紅屋（紅弥とも云う）とは私の家の屋号で、藩制時代は紅屋切符と云う私札を発行する黒田藩御用の米穀商でございました。此の紅屋は藩制廃止（廃藩置県）や明治四年の感田町の大火（通称・紅屋の火事）によって凋落し家業を閉じました。其の後、一族の願いで再興され、血脈は連綿と今日にまで続いて居ります。因みに、木屋瀬では今でも苗字より屋号で呼ばれる事が多うございます。私の苗字は柴田と申します。

さて、前置きが永くなりましたが本題の木屋瀬六月の行事・風物をご紹介申し上げます。

六月一日は須賀神社氏子の還暦行事が行われます。此の行事には在住の氏子のみならず、郷里を離れた木屋瀬出身者の多くが帰省・参加し、旧交を温め盛大に執り行われます。

次に、六月の木屋瀬の風情を申しますと、街全体が〔筑前木屋瀬祇園祭〕の準備一色に染まり行きます。

〔筑前木屋瀬祇園祭〕とは、旧来の〔夏越（なごし）の大祓い行事〕と〔祇園祭礼〕を昭和三十八年より実行委員会形式で併せて執り行うように為ってからの行事名でございます。例年、七月の第二週の土・日に執り行われます。

其も木屋瀬祇園の起こりは古く、祇園社（須賀神社）の創建が室町時代は永享年間（一四二九年～一四四一年）と伝えられ、爾来、何時の世にも氏子の尊神を遍く集め、永々と継承されて来た伝統行事でございます。今も昔も、木屋瀬住民はもとより、近郷近在の人たちもが楽しみにする夏祭りでございます。

さらに、近年では、未来を担い行く若き世代の郷土愛を育む「歴史的文化財産」と云う新たな要素も加わり、木屋瀬全町を挙げて保存・育成に取り組んで居る処です。

此の祇園祭の賑わいの基（もとい）を為す山笠は、元来、高さ九㍍を超す〔岩山造りの舁（かき）山笠（やまがさ）〕であったものが、大正三年の電線架設以降、高さ四メートルの〔屋台型人形飾り曳（ひき）山笠（やまがさ）〕へと移行し、現在に至って居ります。

つづく（記念館）

▼いろはかるたのご紹介

（に）　西（にし）に雨雲（あまくも）　六ツ（むつ）ケ岳（がだけ）

木屋瀬から西南の方向、遠賀川の対岸向こうに山並みを六ケ岳と申しまして、宮若市・鞍手町・直方市にまたがる山塊でございます。「天気は概ね西の方から変わる」と申しますが、木屋瀬では昔から六ケ岳上空の雲の様子で翌日の天気を予測していました。

夏休みイベント報告

こやのせ　たなばたまつり

木屋瀬宿記念館では、8月4日（土）に「こやのせたなばたまつり」を開催しました。昔あそびや人形ボードヴィル・ドラによる人形劇、星座観測などを行い、たくさんのお子さんとそのご家族が遊びに来られました。広場で行われたそうめん流しには、約100名と多くの方に参加いただきました。ありがとうございました。

また、みちの郷土史料館体験コーナーでは、7月21日（土）～9月2日（日）の間、夏休みイベント「むかし体験」を開催しておりました。夏休み期間中ということで、夏休みこども文化パスポートを利用した来館者数が340人と、普段はあまり来館されることがない小中学生のお子さんが数多く来館され、また、そのご家族の皆様にも当館を知っていただく良い機会となりました。ご来館誠にありがとうございました。

最後に、夏休みイベント開催にあたりご協力いただいた皆様に、厚くお礼申し上げます。